CRIMSON COMICS

Sexial Battle

すでに、この戦闘の勝敗は決していた。
斬魄刀を失い、疲弊しきった乱菊に対し、
男たちはまだ余裕の笑みを浮かべている。
乱菊は焦燥を悟られぬようにと不敵に笑うが、
男たちにとってはそれさえも揶揄の対象になった。
……ッ！
くっくっく
その怯えた
子猫のような顔が
たまらないぜ
強がったところで、
腰が引けてるんだよ
ほらほら
もう後もないぜ！？

羽交い締めにされた瞬間、
そのたわわな乳房が衿からこぼれた。
構わず、男を振り払おうとするが、
丸太のような腕はびくともしない。
もがけばもがくほど衿は乱れ、
ついには乳房を完全に露出させた。

ほーら
捕まえたぜ
子猫ちゃん！

ひゅ～
さすがは副隊長殿だ
いいモノをお持ちで

そろそろ
お楽しみの
時間ってコトで……

まずはこの胸を
好きにさせて
もらいましょうか

男たちのギラついた目が
豊満な乳房に向けられた。
戦っていたときよりも
はるかに強い悪寒を感じ、
乱菊はつい目を逸らしてしまう。

このっ！
放せ！

ずいぶんと可愛らしい
反応だな
まさか処女って
わけでもあるまいに

こんなデケェ乳で
それは反則だよな？

まあ、俺たちにとっちゃ
どっちでも構いや
しないんだけどよ！

男が、乱暴に乳房を揉み始めた。
ねっとりとした欲望が
形をなしたようなその手に、
乱菊は思わず声をあげてしまう。
くぅう！　こりゃあたまらねぇ！
吸い付いてくるみたいな胸だぜ！
ああ、つく！
気持ち悪い……！
触るなっ！
悪寒が背筋を駆け抜けた。
その痺れが脳天に達し、息を呑んでしまう。
それを快感からのものと思ったのか、
男は粗野な笑いを浮かべつつしきりに手を動かした。
手のひら全体で揉み込んだり、
上下左右に引っ張ったり。
激しさだけが女を悦ばせるのだと
勘違いしているようだった。
快感などなく、ただ痛みしか感じない愛撫に、
乱菊は心の中で悪態を吐いた。
しかし男の手が乳首をつまんだ瞬間、
あられもない声をあげてしまう。

「おお！　ここか？　乳首が気持ちいいのか？」
「馬鹿なこと言わないでくれる？
あんたみたいな下手くそに揉まれたって、
痛いだけで感じたりなんかしないわよ」
「そう言うなよ。ほら、乳首が感じるんだろう？」
まるで餌を前にした犬のような息を吐く男に、
乱菊は嫌悪感を高めていく。
だが、つねられた乳首の痛みの中から、
小さな快感が生まれ始めているのに気付いて、
心の中で舌打ちする。
(こんなヤツにあたしのおっぱいを
いいようにもてあそばれるだなんて)
自慢の乳房なのだ。
決して、こんな奴らに
好きにさせるためのものではない。
いつまでもこのままでいてはいけない。
乱菊は冷静さを保つように、
男たちを睨み付けた。
(でも、愛撫に夢中になってる
この隙をつけば、上手く逃げられるかも)
「お前、今なら逃げられるかも、
なんて甘い考えをしてるんだろう？」
「え……？」
……!!
あっ……

背後の男が、その豪腕で
乱菊の死覇装を破り捨てた。
油断していたのは乱菊の方だった。
破り捨てられた死覇装は、
もはやただの布きれでしかない。
身を守るどころか秘部を隠すことさえ
できなくなった服を見て、
乱菊はその場にへたり込んだ。
その格好で
逃げられるものなら
逃げてみるんだな
くッ…
さぁ
これからが
本番だぞ

またも背後から押さえつけられる。
そのまま横倒しになり、
男の身体を下敷きにする形になる。
男はそれを厭うどころか、
むしろ楽しそうに喉を鳴らした。
「暴れても無駄だぜ？俺の腕からは逃れられない」
もがき苦しむ乱菊を
本当に子猫のように思っているのだろうか。
男は暴れる乱菊を難なく押さえ込んだ。
……!!
んッ…
（駄目。こいつの力は尋常じゃない……
このままじゃ、あたし）
追い込まれた乱菊はついに、
男たちになぶり者にされる自分を想像してしまった。
自尊心を傷つけられるのは、
肉体的なものよりもダメージが大きい。
戦闘での敗北感と合わせれば、
それはもう十分すぎるほどこらしめであった。

「はっはっは。やっぱたまらねぇぜこの胸はよぉ！」
「や、やめて。痛いじゃないの……んっく！」
「そんなこと言って。どう見ても、感じてますって顔だぜ？」
「ふざけたことを……あぁ！」

乳首をつままれた瞬間、身体が跳ね上がった。
痛みを伴った愛撫だが、
その乱暴さに官能を刺激されているのだろうか。

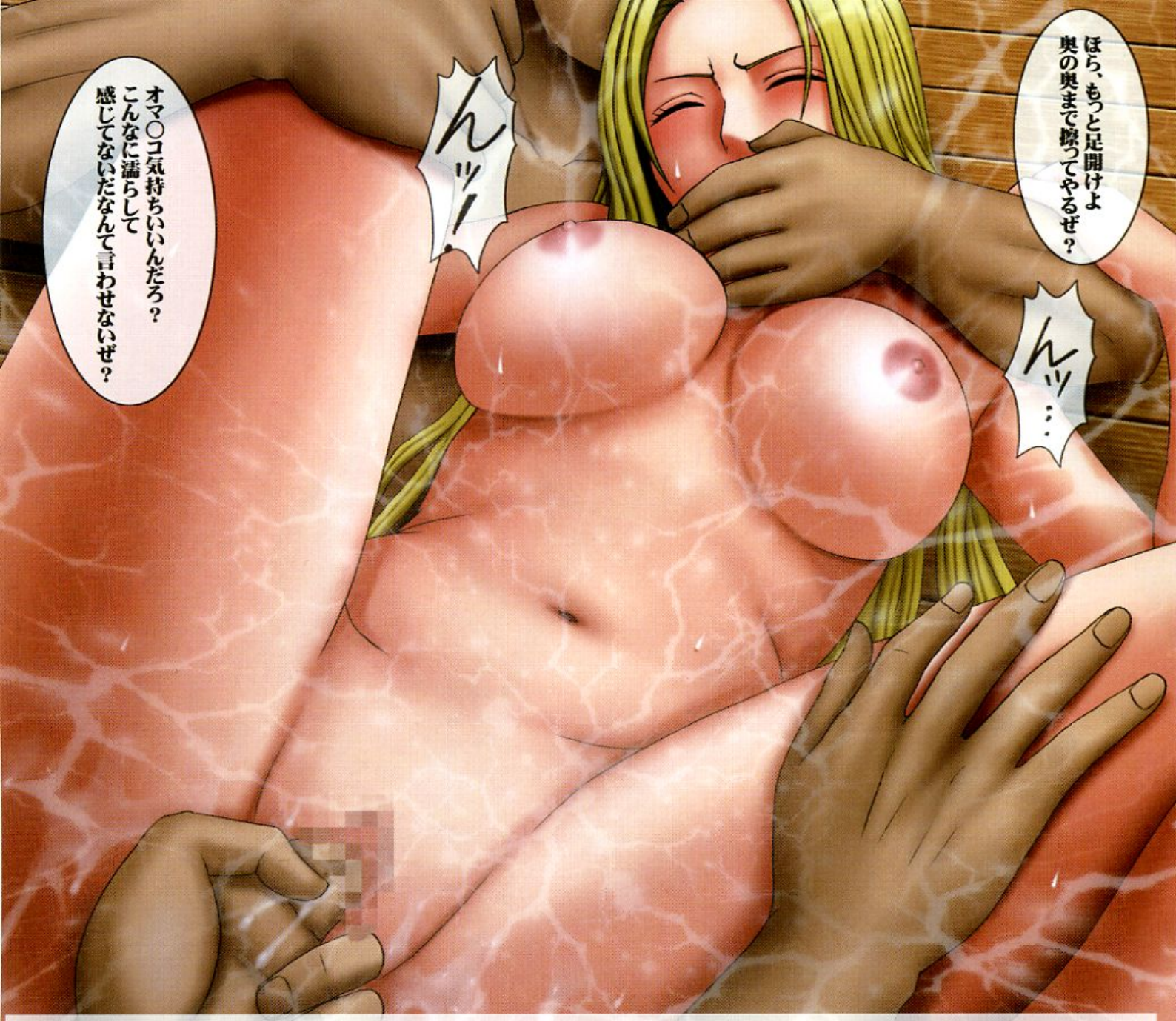
（そんなコトあるはずない。
あたしは、こんな男たちなんかに負けない）

歯を食いしばって耐える。しかし痛みは耐えられても、
快感には反応してしまうのが女の身体だ。
乳首をこねられるとつい声が漏れてしまう。
そこには、甘い情欲が込められていた。

気がつけば、乱暴なだけだったはずの愛撫に感じさせられていた。
優しくなったというよりは、
乱暴されているということが快感になってきているらしい。
普段強気な分、相手が高圧的に出てくると
マゾヒスティックな悦びを湧き上がらせるのかもしれない。
乱菊は自分の新たな一面を
発見したような気がして羞恥にうめいた。

（違う。そんなのはあたしじゃない！
そんな被虐趣味なんてない！）

「どうだ？　そろそろ別の部分も可愛がって欲しくないか？」
「は？　別の部分って……まさか？」



「なっ！　や、やめなさい、そこは……っつ！！」
男の指が、女陰を犯した。
容赦なく膣内に潜り込んでくる指の刺激に、
乱菊は耐えきれず声を張り上げる。
しかし背後から口を押さえ込まれ、
悲鳴すら満足にあげられなかった。

「ひゅ～～！　おっぱい揉んでただけで、もう濡れ濡れじゃねぇか！
副隊長殿はずいぶんと淫乱なんだなぁ！」
「んんう．っ！　ぐっ、んう．ううううう！！」

男の指が、容赦なく膣腔をえぐった。
グチョグチョと卑猥な水音が立つのを聞いて、
乱菊は悲鳴とも喘ぎとも取れるうめきをあげる。
（そんな。こんな愛撫で、あたしが濡れるはずなんてない！）
心では否定していても、身体は正直だった。
それに気付くと同時に、
官能がほどけた縫い目のように一気に開いていく。

男は興奮しきりで指を根本まで突き込み、
膣内で掻き回した。
処女ではないにしてもあまり使い込まれていないのか、
膣壁のシワヒダが指先をくすぐる。
どの壁を擦っても跳ね上がって反応する乱菊が面白いのか、
男の指戯は更にエスカレートしていった。

秘部を剥き出しにされ、指で乱暴な愛撫を受ける。
気がおかしくなってしまいそうな屈辱なのに、
乱菊の胸の奥はうずいたままだった。
（違う。このうずきは怒りよ。
決して快感なんかじゃない！気持ちよくなんてない！）

「ひっ！？　なっ、なにを……ンあぁあああああ！！」

男は、わざと音を立てて愛液を啜った。
その響きが、乱菊に強い背徳感と快感を与える。
膣口とディープキスするようにしてすすり、
舌を突き込む。
そして浅いところをくすぐり、
そのせいでまた溢れ出る愛液を舐め取った。

「ひあっ、あっ！　駄目！
　そんなところ舐めたら……あぁあっ、くぅ！」
「駄目、じゃねぇよ。気持ちいいです、だろ？
　おねだりの言葉は間違えないようにしなくちゃな？」
「おねだりだなんて、そんな……ああぁ、違う！
　あたしは気持ちよくなんかなって……」

なってない。
その言葉は、陰部からの激しすぎる刺激で押しとどめられた。
男の舌がクリトリスを捕らえ、ねぶり始めたせいだった。

「きゃあぁあああ！！
　いやっ、そこは、かっ、感じすぎてっ、あぁあああ！！」
「そうそう。素直に感じてるって言えよ。
　そうすれば、もっともっと気持ちよくしてやるぜ？」

言うが早いかクリトリスにしゃぶりつく。
吸い付き、啜り、舌先で転がした。
痛みにも似た鮮烈な快感が、乱菊の理性を奪っていく。
大きくなりすぎた快感というほころびが、
乱菊のすべてを覆していった。

（くやしい。こんな奴らに……でも、あたし、もう！）

クリトリスを吸われながら、指で膣腔をほじくられる。
乳房を揉みしだかれ、
無理矢理突っ込まれた男の指をしゃぶらされた。

「ほら……次はどうして欲しいのか、素直に言ってみな？」

「い、挿れて……」

「はぁ？　どこに？　なにを！？」

「あたしの、あ、あそこに……お、おま〇こにっ！
　あなたのち〇ぽを挿れてっ、突っ込んでっ！」

言わされた瞬間、最後の理性まで吹き飛んだ。

「もう我慢できないのっ。
　おま〇こにいっぱい突っ込んで、気持ちよくしてぇえ！」

男たちから嘲笑が漏れた。
しかし、それさえも今の乱菊には官能を促すものでしかない。
これ以上焦らされたらおかしくなってしまう。
もはやここにいる乱菊は、
いつもの飄々とした副隊長ではなく、1人のさもしい女であった。

そして乱菊は
縛られ、
失神するまでイカされ続けた…
それはあまりの快楽で
記憶が飛ぶ程だった…
あッ!
あッ!!

気がつけば、素裸で丸テーブルにくくりつけられていた。周囲には半裸の男たちが複数。みな一様に、下卑た笑いを浮かべている。

「ちょっと……これはいったい、どういうこと!?」

「どうもこうもないさ。この状態を見れば、なにされるかくらい想像できるだろう?」

もちろん、容易に想像できる。この男たちは、乱菊を嬲るつもりなのだ。

男はいやらしい笑いを顔に貼り付けたまま、乱菊の口に小瓶を突き込んだ。

どろりとした粘液が、まるで生きているかのように体内へと流れ込み、少しむせ返る。

毒ではないのだろうと思いつつも、呑み込むにはやはり抵抗があった。

「くっ……なにを呑ませたの!?」

「これからのことが楽しくなるおクスリさ。もっとも、こんなものがなくったって、楽しくなるに決まってるんだけどな」

喉の奥が熱くなってくる。酒に似た熱さだが、それ以上の火照りを覚えた。

「ふっ、ふざけないでよ! なんでこのあたしが、あんたたちみたいなザコに!」

「おや?さっきはあんなにイカせて欲しいって淫乱女みたいに叫んでたのになぁ?」

「いまさらそんなこと言っても意味ないぜ。アンタの本性は分かってるんだからな。ククク」

「くぅっ……!」

息巻いても無駄だ、とばかりに別の男が身体中にオイルを塗り始める。

いや、オイルのような粘液質のそれは、先ほど呑まされたものと同質のものらしい。

塗られた端から、肌の感覚が鋭くなっているのが分かった。

(まさか、身体中に媚薬を塗りたくる気? 塗られただけでこんなにピリピリし始めるような強力なやつ、アソコにまで塗られたらどうなっちゃうの!?)

男はオイルを塗りたくりながら乳房を揉んだ。

普段ならなんとも感じないレベルの接触も、全身が媚薬まみれになっている今の乱菊には淫靡な愛撫だった。

声をあげまいとしても、顔は歪んでしまう。それを見た男は満足げに笑い、オイルを股間へと垂らし、塗り始める。

「くっ! や、やめてよ! そんなところにまで……」

「いいから、ほら! 足を開くんだよ!」

無理矢理足を広げさせられ、陰部が剥き出しにされ、たっぷりとオイルを塗られる。

そして、顔から足の先までまんべんなく塗り終わった頃、乱菊は体内からも熱くなっているのを感じていた。

「あぁ！　や、やめて！　んあっ！あはぁっ！」

下準備が終わった途端、男たちは性欲を剥き出しにして襲いかかってきた。
自分たちの手にもオイルをたっぷり付け、更に塗り込むかのように乳房を揉み込む。ヌトヌトとした感触は、荒々しいはずの愛撫にも快感を滲ませていた。

「たまらねぇ！　こんなデカいのにプリップリだぜ！」

乳房だけではなく、乳首までつままれた。
しかしオイルで滑るせいか、うまくつまめない。それがもどかしさを生み、焦らされている感覚が官能を揺さぶる。
全身を媚薬まみれにされているからか、普段よりも感度が高い。それが更なる揺さぶりをかけ、乱菊の心を惑わしていく。

（駄目。胸だけでこんなに感じるなんて……もっと、激しく、もっとつまれたいなんて思っちゃうだなんて！）

知らず、あえぎ声が漏れていた。こそばゆさが乳房から全身に伝わる。
それでも我慢しなければと声を押し殺し、男たちへの罵倒の言葉さえも呑み込んでしまう。
しかし乳首をぎゅっとつまれた瞬間、我慢は限界へと達した。

「きゃあっ！　駄目っ、おっぱいの先っちょ駄目ぇっ！」
「ははは。いい声で鳴くじゃないか。さすがは10番隊副隊長殿」
「あのガキンチョの隊長様に、毎晩可愛がってもらってるんだろ？
あんなガキより、俺たちの方がずっと気持ちよくしてやれるってコトを教えてやるよ」

足をこじ開けられ、陰部への愛撫が始まった。乳首以上の快感が一気に脳天まで駆け上がり、乱菊はまたあられもない声をあげてしまう。

「ひゃっ、やめっ！　あぁあ、そこは……そこは許してっ！」

男は聞く耳を持たず、割れ目に舌を突き込んだ。媚薬で真っ赤に充血したヴァギナからはすでに愛液が溢れ出しており、
オイルの粘液と混ざり合って淫らなテカリをきらめかせている。男はそれをジュルジュルとすすり、ためらいなく呑み込んでエクスタシーさえ感じていた。

「駄目なの……お、お願い。今、ソコを舐められたら、あたし……あぁあ」
「それじゃ、舐めるのをやめて、今すぐブチ込んでやろうか？」
「い、いやぁ……それだけは。それだけは駄目ぇ……」

すでに力なく訴えかける乱菊に、男たちはにんまりと笑って頷いた。

「そうだな。じゃあ、突っ込んでくださいってお願いされるまでは、入れないでおいてやるか」

犯されずにすむの？　そんな楽観的な思いが脳裏をよぎった瞬間、男は馬乗りに乗ってきた。

「な、なに！？　いや！」
男はいきり立ったペニスを、乱菊の乳房で挟み込む。
それだけではなく腰を前後に揺すり、胸の谷間を穴に見立てて抽送し始めた。
「くぅ！　このデカさ。やっぱり、たまらねぇぜ！」
塗りたくられたオイルが愛液の代わりになっていた。
スムーズな抽送で徐々に熱を帯びていく乳房。乱菊は、自分でも信じられないほど乳房で感じてしまっていた。
（なんでこんなに熱いの？　ペニスを……まるで、膣に突き込まれてるみたい！）
ゴツゴツとしたペニスの感触が分かる。脈打ち、今にも射精しそうなほど膨れている。
しかし男は手慣れているのか、ニヤニヤと笑いながら乱菊を見下ろした。
「おっぱいで物足りなくなったら言いな。すぐにマ〇コにブチ込んでやるぜ？」
「ふざけないで！　誰があんたみたいなヤツに……ンッ！」
どんな威嚇も、あえぎ声が混じってしまっては台なしだった。男は腰の動きを止め、両の乳首をつまんで持ち上げた。
引っ張られて痛いはずなのに、刺激的な快感となってしまうのは媚薬のせいか。
「ほらほら、どうした？　そんなんじゃ、ちっとも怖くないぜ？」
「くぅ……薬なんて使って、卑怯だとは思わないの？」
「薬に負けるあんたが弱いだけさ。それと……快楽にも負けやすいみたいだしな」
周囲で見ていた男たちからも笑いが漏れる。あまりにも屈辱的な状況に、乱菊は理性をなくしかけていた。
更に、飲まされた媚薬の効果が高まっているのか、下腹部の熱さが最高潮に達している。
イズリされているだけで絶頂さえ迎えてしまいそうな状況に、理性どころか意識まで失いかける。
「おい。おねむの時間にゃ、まだ早いぜ！？　先にミルクが欲しいだろ？　なぁ！？」
「ち、違う……そんなもの！」
「素直になれよ。もう、欲しくてたまらないハズだぜ？　一言言えば、楽にしてやる」
「違う……あたしは、そんな……あぁ……」
「ほら。言っちまえよ？　俺たちのザーメンミルク、おま〇こで呑ませてくださいってよ！」
「あぁ……あ、あたしは……おま〇こに……」
乱菊は、自分の心臓の音で、自分の声さえ聞こえなくなりそうだった。
「おま〇こに、ザーメンいっぱい呑ませて……っ！」

心の折れた乱菊に、男たちはまったく容赦しなかった。すでにたっぷり潤っていた膣へと極太のペニスをねじ込み、荒々しく腰を振る。入れられただけで一瞬意識が飛び、乱菊は甲高い嬌声をあげてしまった。

「あぁあああ！　入るっ、入ってくるぅうううう！！」

身体中がペニスを待っていたかのような快感。膣壁を掻き分けて押し込まれた巨根に、乱菊は確かな官能を覚えていた。乳首の先も張り詰め、クリトリスも勃起しているのが分かる。膣内にあるペニスの脈動さえも感じて、一気に高みへと登り詰めた。

「駄目っ！　イくっ、イっちゃうっ！　ち〇ぽ来ただけでイっちゃうぅうううう！！」

絶頂の衝撃で身体が跳ね上がった。同時に男も射精したのか、子宮の中にまで熱いモノが満たされた気になる。

「ははは！　すげぇ淫乱ぶりだな。ちょっと突っ込んでやっただけで、すぐにケツ振りやがって」

ペニスが引き抜かれ、またすぐに突き刺される。

先ほどまでのペニスとは長さが違うようで、最初から子宮口をガンガンと叩かれた。

腹の奥を破られるような感じが、乱菊に被虐的な快感をもたらす。犯されているのだという絶望感も相まって、更なる絶頂感に身を揺らした。

(すごい。すごい！　あたし、こんなにイってる。イきすぎて、おかしくなる！)

まるで身体中が性器になったような気分。腰を抱かれても、乳房を揉まれても達してしまいそうになっていた。

それどころか、実際に軽く達することもあった。

「くぅ……し、締まりすぎるぜ！　こんなの、すぐに出ちまう！」

「来て、来てぇ！　もういいから、あたしの中にたっぷり注ぎ込んで、ドロドロにしてぇ！」

一度タガの外れた性欲は、気丈な乱菊の口から淫らな懇願を叫ばせる。それがまた男たちの琴線に触れたらしい。

一斉に息を呑み、なまめかしい姿態に群がった。

「んあっ！　きゃぁあああああああ！！」

膣の最奥までねじ込まれ、そこで射精される。

熱いものが体内を満たしてく快感に、乱菊はあられもない喘ぎを漏らした。

「はぁ、はぁ……熱い。ザーメン、気持ちいっ……あぁあああ」

何度も何度も絶頂を迎え、乱菊の理性は消し飛んでいた。

そして、自分を犯している男たちに愛しい男の姿を重ねる。それがまた絶頂を促して、そのまま意識を遠くに飛ばした。

「いいかげん、諦めたらどうだ？」

複数の男に追い詰められて、織姫は息を呑んだ。
男たちの言うがままに諦めてしまったらなにをされるか分からない。
ただ命を奪うだけなら、男たちもこんなに回りくどいことはしないだろう。

「ほらほら。後がないぜ織姫ちゃんよ？」
「自慢の術が使えなくなっちまえば、もうなにもできやしないんだろうが」
「きゃっ！」

無造作に伸びた手に小突かれてよろける。
まるで子犬でもじゃらすかのような手さばきだったが、
今の織姫にはそれですらかわす体力もない。

（いけない。このままじゃ捕まっちゃう……）

男たちがいっせいに飛びかかってきたら、
あっさりと捕まってしまうだろう。
そうしないのは、追い詰めることを楽しんでいるからだ。
男たちの目はひどくギラついて、
しきりに舌なめずりまでしている。
獲物を追い詰めた猟犬の表情。

「あんっ！」
股関節あたりを叩かれ、体勢を崩す。
もちろん走り出すことなどできず、また大きくよろけてしまう。
「可愛い声で鳴いてくれるぜ。こりゃあ」
「それに、見ろよあの胸……たまらねえぜ」

男たちの目に嗜虐的な火が灯った。
織姫は自分のことに手一杯で、男たちの熱気に気付いていない。
肩で息を吐くその姿が、男たちの欲望を更に燃え上げさせているとも気付かずに。

気力を振り絞って男たちを睨み付ける。
まだ逃げ道はあるはずだと思案を
巡らせた織姫の視界に違和感があった。
(あれ？　1人いない？)
「さぁて。お遊びはここまでだ！」
「え！？」
背後から腕を押さえられたのと同時に
シャツをまくり上げられた。
違和感の正体はこれだった。
先ほどまで目前にいた男の1人が、
いつの間にか背後に回っていたのだ。
男たちの隙を見つけるどころか、
逆に隙を突かれて囚われてしまう。
自分のふがいなさに、織姫は苦悶の声をあげる。
「ひょう！　なんだよこのデカパイ。
反則だろコレはよ！」
「や、やめて！　放してくださいっ、あっ……んんっ！」
「ははは、いいぞ。もっと暴れろ。
自慢の乳房が揺れまくって、目の保養になるぜ」
男の揶揄に一瞬動きを止めると、
背後の男が更にシャツをまくり上げる。
(駄目。これじゃ、全部脱がされちゃう……
全部見られちゃう！)
なんとか男を振り解こうと抵抗するが、
すでに疲労が限界に達している織姫では
まくられたシャツを下ろすことさえできなかった。
「いやぁ……放して。放してくださいぃ……んんっ、くぅ！」
「駄目だな。逃げたかったら自力で逃げてみろ……
その方が楽しめるってもんだ」
男の手が、剥き出しになった乳房に伸びた。

「いやあっ！　やめてっ、
触らないで……んあっ、やんっ！」
押さえつけながらの行為は
とても優しい愛撫とは言えなかった。
しかし、疲労した肉体の奥底から、
女の悦びを湧き上がらせるには十分。
（くすぐったい……でも、胸の奥がジンジンしてくる！）
織姫は一瞬、乱暴されていることを忘れた。
そのコトに気付いたのか、
男が鼻息を荒くして耳元でささやく。

「なんだよ？　もう感じ始めてるのか？
いやらしい女だったんだなぁ？」
「え？　ちっ、違っ……あぁあ！！」

前の男が、乳首をしゃぶり始めた。その行為に合わせて、
後ろの男が乳房を揉む。連携の取れた愛撫に、
織姫はつい官能の喘ぎを漏らしてしまう。
それでも織姫は、無意識に男たちを
引きはがそうと暴れる。
しかし大の大人2人に挟まれてしまっては、
蜘蛛の巣にかかった蝶のようなものでしかない。
「くくくっ。乳首が勃起してきたぜ？
そんなに気持ちいいのかよ」
「うぅ、ち、違います……んっ、いや！
先っぽばっかりいじらなっ……んんっ！」
甘噛みされると、全身に鋭い痺れが走った。
それは股間にも伝わり、女の部分を反応させる。
（ウソ。あたし、濡らしてる？　こんな風に
無理矢理されて、気持ちよくなってる！？）

身体の素直な反応が疎ましくさえあった。
このままでは気持ちよさに負けて、どうにかなってしまいそう。
しかし、心がどれだけ抵抗してみても、
男たちにとっては身体が反応さえすればいい。
織姫の抵抗が弱くなったのを見て、
男はすかさず服を脱がしにかかった。
「あ……あぁ。そんな……」
あっという間の出来事だった。
後ろの男にシャツを脱がされたかと思うと、
前の男にはズボンを脱がされた。
下着姿1枚だけになった織姫は、
恥ずかしいところを隠しだけで精一杯になって、
その場に座り込んでしまう。
ぱあ
ぱあ
いい眺めだぜ
女には
恥じらいってもんが
なくちゃな

男たちに無理矢理身体を開かれる。
腕と足を押さえつけられ、あられもない姿をさらされた。
たわわな果実が揺れ、男たちの目を釘付けにする。
先ほどまでの愛撫のせいか、その先端はキュッとすぼまり屹立していた。

「なんだ。嫌がってるクセに織姫ちゃんもビンビンじゃないか」
「違います。これは、その……」
「素直になりなって。本当は今すぐにでも
俺たちに犯してもらいたいんだろう？」

言い淀む織姫に、男たちは都合のいい解釈をする。
下卑た笑いを耳にして、織姫は更に口ごもってしまった。

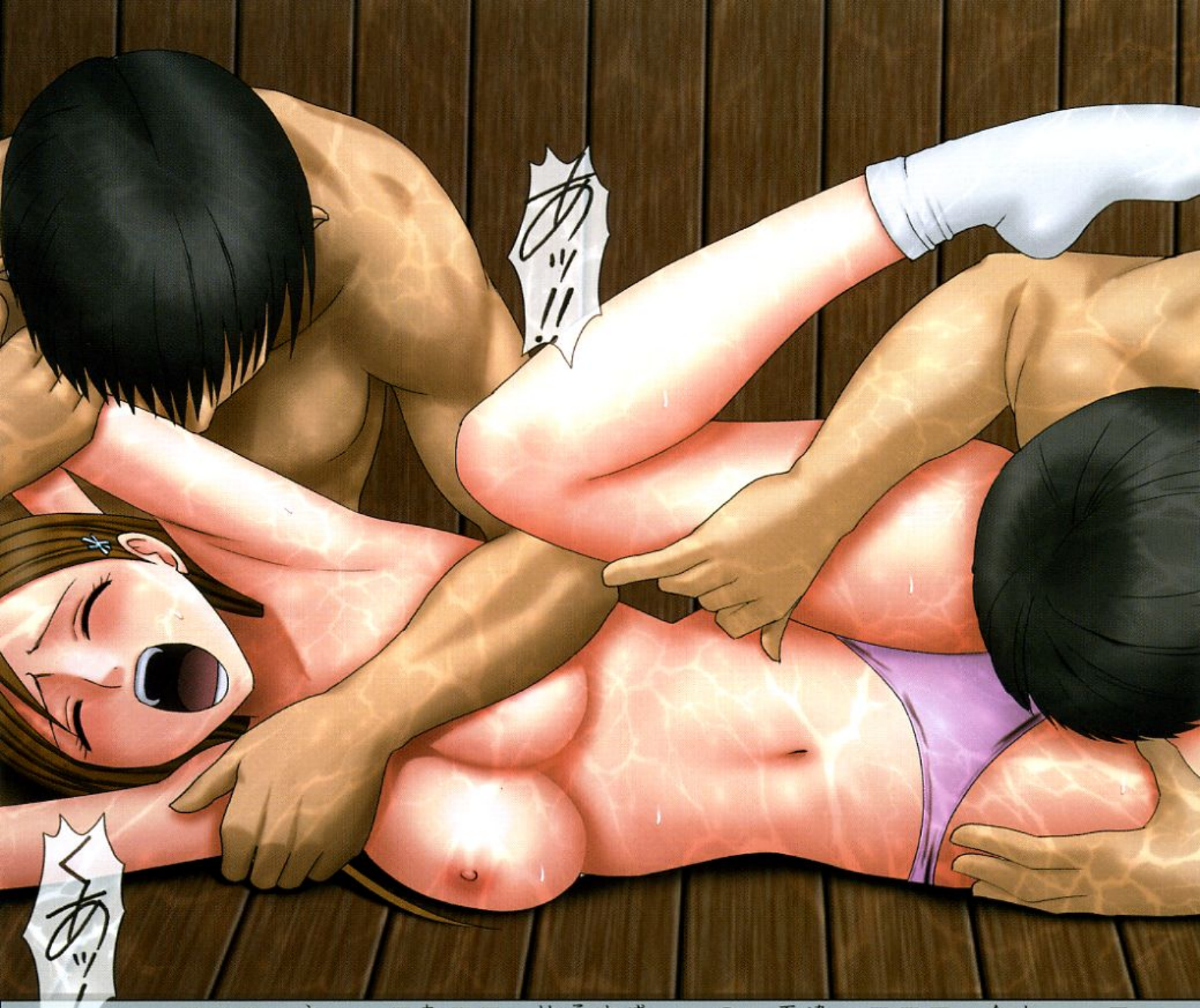
（あたし、犯されるの？　こんなところで、こんな人たちに？）

まるで遠い世界の話を聞いているかのよう。
まるで現実感がない状況に、織姫は抵抗する力をなくしていく。
そして男たちは、そんな少女の身体をまさぐり始めた。

「あぁあっ！　んっ、く……ふぁあああ！」

胸を、腹を、太ももを、男たちの手が舐めるように這い回る。
そのこそばゆさと、得体の知れない熱さに喘ぐ。
織姫は秘所が濡れていることを改めて感じとり、
その羞恥にも声を絞り出した。

「ほら、胸以外にはどこが気持ちいいんだ？
　ちゃんと言えば、たっぷりとねぶってやるよ」
「はっはっは。織姫ちゃんはおっぱいがお好みだとよ。
ご希望通り、弄りまくってやろうじゃねぇか」
「え！？　違います、あたし、そんなこと！
　望んだりしてません……ンあっ！！」



「ふあっ、あっ、ンぁあああああああああああああ！！」

股間に顔を埋められた。ショーツの上から秘部を舐められ、太ももを撫で回される。胸もまだ揉み続けられたままで、全身くまなく官能の刺激に晒された。

「おいおい。もうショーツの上からでも分かるくらいぐっしょりじゃないか」

「乳首も立ちっぱなしだぜ。身体中で気持ちよがってるんだな」

「はぁ、はぁ……ち、違……あぁ……」

違うと言い切れない。言わなければいけないのに、否定しきれない自分がそこにいた。

（駄目……駄目だめぇ。快感に負けたら、駄目なんだからぁ……あぁ）

いっそ戦いに負けて、命を落とした方が良かった。感情ではそこまで思い詰めるが、本能が甘い横やりを入れてくる。生きていればこそこんなに気持ちよくなれるのだと。快感に身を任せてしまえば、辛いことも苦しいことも忘れられると。

「おま〇この方は俺たちのち〇ぽが欲しい欲しいって泣いてるぜ？」

「前からも後ろからも、好きなだけ犯してやるよ。身体の中も外もザーメンまみれにしてやるからな」

「あぁ……あぁあぁ……っ！」

男たちの言葉が女の本能をくすぐり続けた。言葉のひとつひとつに悶え、まるで洗脳されるかのように導かれていく。

「だから、ほら。言っちまえよ？」

「俺たちのち〇ぽで、ま〇こをグチャグチャにして欲しいって言ってみろよ！」

「……あぁ、あ、あたしの……お、おま〇こ……」

乳首を、クリトリスをくすぐられる。もう、織姫の身体は快楽に逆らえなくなっていた。

そして
両手両足を縛られ
無抵抗になった体を
イクかイカないかくらいの
絶妙なタッチで
責められ続けた。

3時間以上嬲られた後に
最後は全身同時攻めで
激しくイカされ、
織姫は失神してしまった…。

「んんっ！　や、やめてください。触らないで！」

素裸に剥かれ、腕も足も椅子に縛り付けられた織姫には、もはや叫ぶことしか許されなかった。
しかし、叫んでも男たちを悦ばせるだけ。それでも叫ばずにはいられない状態に、織姫は目まいさえ起こしていた。

「お願いします。これ以上触らないで……そ、そんなに揉まないでっ」
「なに言ってやがる。裸の女がいたら触ってやるのが礼儀ってもんだろうが」

鼻息を荒くした男たちが、四方八方から少女の柔肌をまさぐった。
正面から乳房に掴みかかり、荒々しく揉み上げる者。横合いから手を伸ばし、腕や腋に触れる者。首筋を撫でつけ、髪をすく者。
男たちの手はまるでナメクジのように肌をはいずった。その不快感に絶えきれず、織姫はまた悲鳴をあげる。

「いやっ、そんなところを……あぁあ！　駄目です、お願いっ！」
「そんなにお願いされちゃあ仕方ない。もっともっと可愛がってやるぜ」

違います。そう言う間もなく、更に身体中を撫で回された。特に乳房への愛撫は激しく、複数の男が同時に両の乳房に群がった。

「デカくて、張りがあって……すげぇモンもってるな」
「小娘とは思えないな。こりゃあもう、立派なオンナだぜ」

卑猥な言葉を耳元でささやかれたり、面と向かって言われたり。織姫は恥ずかしくなる前に、悔しさと悲しさを覚えた。
同時に、怒りも。しかし身体の自由を奪われ、なすがままの人形になるしかない状況では、理性を保つのさえ難しい。

「放して。もう許してください！　助けてっ！」

悲痛な叫びにさえ楽しげな笑いを浮かべながら、男たちは織姫の身体をむさぼった。
その笑い声に嫌悪感を覚えても、乳首をつねられた刺激でつい喘いでしまう。
それは痛みのはずなのに、何故か織姫の心の奥底を揺さぶった。

（あぁ、駄目。こんなに触られたら、頭がおかしくなっちゃう）

織姫は痛みや恐怖に耐える震えの中に、こそばゆさや快感から来るものが混じり始めていることに気付いてしまった。

「んんっ！　や、やめてください。触らないで！」

素裸に剥かれ、腕も足も椅子に縛り付けられた織姫には、もはや叫ぶことしか許されなかった。
しかし、叫んでも男たちを悦ばせるだけ。それでも叫ばずにはいられない状態に、織姫は目まいさえ起こしていた。

「お願いします。これ以上触らないで……そ、そんなに揉まないでっ」
「なに言ってやがる。裸の女がいたら触ってやるのが礼儀ってもんだろうが」

鼻息を荒くした男たちが、四方八方から少女の柔肌をまさぐった。
正面から乳房に掴みかかり、荒々しく揉み上げる者。横合いから手を伸ばし、腕や腋に触れる者。首筋を撫でつけ、髪をすく者。
男たちの手はまるでナメクジのように肌をはいずった。その不快感に絶えきれず、織姫はまた悲鳴をあげる。

「いやっ、そんなところを……あぁあ！　駄目です、お願いっ！」
「そんなにお願いされちゃあ仕方ない。もっともっと可愛がってやるぜ」

違います。そう言う間もなく、更に身体中を撫で回された。特に乳房への愛撫は激しく、複数の男が同時に両の乳房に群がった。

「デカくて、張りがあって……すげぇモンもってるな」
「小娘とは思えないな。こりゃあもう、立派なオンナだぜ」

卑猥な言葉を耳元でささやかれたり、面と向かって言われたり。織姫は恥ずかしくなる前に、悔しさと悲しさを覚えた。
同時に、怒りも。しかし身体の自由を奪われ、なすがままの人形になるしかない状況では、理性を保つのさえ難しい。

「放して。もう許してください！　助けてっ！」

悲痛な叫びにさえ楽しげな笑いを浮かべながら、男たちは織姫の身体をむさぼった。
その笑い声に嫌悪感を覚えても、乳首をつねられた刺激でつい喘いでしまう。
それは痛みのはずなのに、何故か織姫の心の奥底を揺さぶった。

（あぁ、駄目。こんなに触られたら、頭がおかしくなっちゃう）

織姫は痛みや恐怖に耐える震えの中に、こそばゆさや快感から来るものが混じり始めていることに気付いてしまった。

「いやっ！　それだけはイヤぁあ！」

必死の抵抗も虚しく、織姫の膣は男性器を受け入れてしまった。
体内にめり込んでくるペニスの感覚が、不快感と共に強い快楽をも押し込んでくる。

「おぉ！　キツいぜ。もしかして初めてだったのかい？」
「あぁぁ……いや。抜いて。抜いてよぉ……」

嗚咽混じりの喘ぎに、男は更に興奮した。一度、無理矢理最奥まで突き込んだかと思うと、身体を大きく前後させ始める。

「痛いっ！　いやっ、やめて！　無理に突っ込まないでぇ！」

狭い媚肉を掻き分ける快感は、なににも勝るものだった。
しかも突き入れる度にそして引き抜く度に揺れる乳房の美しさも。その苦痛と快感の入り交じった悲鳴も極上。
ビクンビクンと震える身体に、強姦しているのだという嗜虐心をくすぐられて、
男は何度も何度も腰を振る。愛液が絡む水音も、股間がぶつかる打撃音も、なにもかもが最高の官能だった。

「ひいっ、駄目っ……おま〇こ壊れちゃうっ、そんなに突っ込まれたら、駄目になっちゃうぅう！」

まるでナイフで刺されているかのような感覚だった。
織姫は腹の中を男の凶器で掻き回され、絶望で意識を失いそうになる。
しかし激しい痛みが、失神させまいと身体を跳ね上げる。

「おぉおお！　出るっ、出るぞ！　たっぷり出してやるぞぉ！」
「え！？　ま、まさか……いや！　中で出さないで！」

恐怖ですくみ上がった身体。それは膣内も同じ。
ただでさえ狭い膣道が更に収縮し、いやいやよと言いながらも男の精を絞りだそうとぜん動する。
男はケダモノのように腰を振り、爆発する寸前、ペニスをすべて膣内に収めた。

「いや、いやっ、いやぁあああああ！」

男が呻いたのと同時に、織姫は体内に熱いモノを感じた。それが射精だと分かった瞬間、目の前が真っ白になる。
膣内で跳ね回るペニス。その精液が、まるで媚薬のように織姫の体と心に染み渡る。

「ほらほら、うっとりしてる場合じゃないぜ？　まだ次があるんだからな」
「誰の子になるか分からないくらい、たっぷりと中出ししてあげるからね」

身体中が熱くなっていた。頭はぼんやりとしているのに、肌はひどく敏感になっていてちょっと触れただけでもピリピリと電気が走る。
少し前に飲まされたクスリのせいだろうか。とにかく、身体中がうずいて仕方がなかった。

「はぁ、はぁ、こ、こんなの駄目……気持ちよすぎるぅ……んんぅ」

うずいているのは、乳首や陰部。こそばゆい感じに耐えきれなくなり、自らそこへと手を伸ばしていた。
ジンジンと熱くなっている乳首をこねると、強い電気が背筋を駆けめぐる。もうドロドロにとろけきっているアソコに触れると、目の奥に火花が散った。
そのまま、特に敏感な突起に触れていればすぐに達することができそう……織姫はそう思って、息を呑んだ。

「おっと！　勝手にイったりするなよ？」
「え！？　な、なんで……」
「観客の俺らをさしおいて、1人で気持ちよくなろうってのか？」
「そうそう。視姦してる俺らも気持ちよくしてくれなくちゃね。1人でイくのは禁止」
「そんな……」

織姫の周りには、数名の男たちがいた。みな一様に素裸で、自らを慰めている織姫を視姦して楽しんでいる。中には、同じように自慰に耽るものまでいた。
(そうだ。あたしは今、この人たちのオモチャなんだ)

少しだけ我に返る。しかしそれは不幸でしかない。こんな時に理性などは邪魔ものでしかない。織姫は自ら乳首をつねり、その快感で理性を飛ばした。

「あの……お願いします。イかせてください」
「駄目だ。それに、もっと見やすいように足を開くんだ。おま○こむきだしにして、俺たちに見せつけてくれ」
「分かりました……んん」

逆らうことなどできない。股間を開き、ユルユルになっている女陰を男たちにさらけ出す。自ら媚肉を掻き分け、真っ赤に充血した谷間を見せつけた。
男たちから歓声があがる。それが頭の中に直接響いて、更なる官能を湧き上がらせた。

「あぁ、駄目っ……我慢、できないっ！」

絶頂禁止と言われても、身体が勝手に高みへと上ってしまうのだから仕方がない。それでもなんとか歯を食いしばり、絶頂を堪える織姫。
その苦悶の表情が気に入ったのか、1人の男が織姫の腕を掴んで立ち上がらせた。

「え……？」
「これ以上我慢させちゃ、可哀想ってもんだからな」

男は織姫を抱きかかえ、そのまま腰を下ろす。自分の股間部分で織姫にあぐらをかかせ、座位で膣へと侵入した。

「あっ、きゃっ！　ンぁあああああああああああ！！！」

自らの体重で、一気にペニスを呑み込んでしまう。愛液は十分だったが、ほぐれきっていなかった膣への唐突な突入に、織姫の身体は悲鳴をあげた。ただしそれは、絶頂ゆえの悲鳴だった。

「あぁあ、イく！　イってる！　おち〇ち〇入れられただけで、すごくイってるう！」
「ははは、いいぞ。好きなだけイけばいい。ギュウギュウ締め付けてきて、いい感じだ！」

男の声など耳に入らず、織姫はただ絶頂の電撃に意識を飛ばす。しかしすぐに我に返って、また嵐のような官能に身を委ねた。
男の巨根が子宮口を突いているのが分かった。膣壁を押し開く脈動に合わせて身を震わせる。
クリトリスが男の股間に押し付けられているのをいいことに、自ら腰を振るって更なる官能を求める。

（また来る。大きいの来る……死んじゃいそうなくらい激しいアクメ、来るっ！）

すでに自分がなにを叫んでいるのかさえ理解できなかった。口からは絶頂の悲鳴と喘ぎしかでていない。
もしかするとひどく淫らなことを口走っているのかもしれないが、織姫自身はもう無意識だった。

「よしよし。子宮の中にまでたっぷりと射精してやるからな」

男は織姫の背骨を折らんばかりに抱き締め、激しく腰を突き上げる。
もはや痛みさえ快楽になってしまう少女は、荒々しい男の行為に息を呑んだ。そしてついには白目さえ剥いて、絶叫をあげる。

「イくっ！　あたしもう、死んじゃうぅぅぅぅぅぅぅぅぅぅ！！」

体内を満たしていく精液の熱さを感じながら、織姫は心の中の大事なものが壊れたのを知った。
それは、理性というものであったかもしれない……

(まさか、この儂がここまで追い詰められようとはの)
夜一は自らの未熟に舌打ちした。
相手はたった3人の男。
確かにそれなりの力量は持っているようだったが、
それよりも連携プレイが上手く、じわじわと追い込まれていた。
気付けば、もう後がない状態。
隠密機動にとって敗北はつまり死を意味する。
夜一は自らを戒めるように唇を噛んだ。
ぱあ
ぱあ
さぁ
そろそろ
終わりにしようか
おとなしくしてりゃあ
これ以上痛い思いを
しなくてもすむぜ?

「一瞬で殺(や)れるというワケか。
じゃが、儂の首はそう簡単には取らせぬよ」

男たちが顔を見合わせてきょとんとする。
そしてすぐさま笑い出した。

「はっはっは。確かにヤることはヤるが、殺したりなんかしねぇよ」
「痛い思いどころか、気持ちよくしてやろうってんだ。
だから、さっさとおとなしくしやがれ！」

「なっ！？」

(殺さない？　でも、ヤるだと？　それはつまり……)

性的な意味。つまり男たちは、自分を陵辱しようというのだ。

「……くだらぬ。お主ら、
この儂がそんなことを許すと思っているのか？」
「許すも許さないも、お前は今から俺たちに犯されるんだよ」
「すぐに自分から欲しがるようにしてやるぜ？
だから、ほら……そろそろ終わりにしようぜ！」

男が突撃してきた。不意を突かれた夜一は丹田を突かれ、
思わずうずくまってしまう。
その隙を男たちが見逃すはずがなかった。
まるで砂糖にたかるアリのように、いっせいに女体へと群がった。
「さぁ、お楽しみの時間だ！」

情緒もなにもなく、男たちは夜一の身体をむさぼり始める。
腕を押さえ、胸を揉みしだき、股間をまさぐる。
優しく快感を与えようなどという思いはまるでなく、
ただひたすら男の欲求を満たすだけの行為だった。

無造作に股間をいじる手に、夜一は言いしれぬ情動を覚えた。
乱暴なはずのその愛撫に呼応して、子宮がうずくのを感じたのだ。
(いかん!早く振り解かねばっ!)

しかし男たちの力は強く、
疲弊しきった夜一には簡単に振り解くことなどできそうにもない。
隙を突ければいいのだが、男たちも無能ではなかった。
「へへへ。乳首勃ってきてやがるぜ?」
「あぁ、ま○この方もネチョネチョしてきやがった。
どうやら、ヤることを許してくれてるようだぜ?」
「くっ……そんなハズがなかろう!」

なんとか力を振り絞る。片方の腕が自由になった隙を突いて、
まずは1人打ち倒そうと手刀を振るうが、
あっさりと受け止められてしまった。
「まだそんなに動けたか。
こりゃあ、無理にでもおとなしくなってもらうしかないな」
そして男はにやけ顔のまま、素早く荒縄を駆使した。

「ぐぅ……こ、こんな……」

あっという間に縛られ、更に服まで引き裂かれる。
あられもない姿を男たちにさらすことに
なってしまった夜一は、
改めて自分の未熟に唇を噛んだ。

「くくく。元隠密機動の総司令といっても、
裸になっちまえば可愛いもんだな」

言いながら、遠慮なく女陰をまさぐる男。
その指戯に苦悶の表情を見せる夜一。
しかしそれは、痛みから来るものではなかった。

「もうおま○こもグチョグチョだ。こりゃあ、
早く入れてやらなきゃ可哀想だぜ」
「ふん……馬鹿を言うな。
この程度で儂が屈するとでも思うておるのか?」
「強がりだな。そんなところも可愛いぜ」

「ンあっ！　くぁあああああ！！」

男の指が膣へと潜り込んだ。
その衝撃に思わず声を上げてしまう夜一を見て、
周りの男たちもせせら笑う。

「ははは！　こいつ指マンで悶えてやがるぜ？」
「もっと足を開かせろよ。
指をくわえ込んだま〇こを見せてくれ」

はやし立てる男たちの声に、
夜一は紅潮してしまう。
それは恥辱と怒りの入り交じったものだったが、
男たちには官能に悶えているとしか見えなかった。

(いかん。このままもてあそばれ続けては、
心はともかく身体がいうことを聞かなくなる)

膣内でうごめく指の感触に喘ぎながら、
夜一はなんとか理性を保とうとする。
しかし落ち着こうとすればするほど
女陰を犯す男の指戯を強く感じてしまった。

「くっ……も、もう抜け。
そこばかりされていては…
気がおかしくなる……んんっ！」

「おいおい、犯されてる側が
そんなお願いしてイイと思ってるのかよ」

そう言いながらも、男は膣から指を引き抜き、
胸を揉み始めた。
愛液に濡れた指先で乳首をこねながら、
耳元で荒い息を吐き続ける。

「このオッパイの張りがたまらないぜ。
お前、ま○こよりこっちの方が好きなのか？」
「うぅ……」

違うと言いたかった。違わないとも言いたかった。
夜一は、先ほど自分がなにを言ったのかを
思い出してゾッとした。

(そうだ。儂はなにを言っている。
あれでは、まるで求めているようではないか)

「とにかく、俺たちは優しいからよ。
オッパイを揉みくちゃにして欲しいって言われちゃあ、
叶えてやらないわけにはいかないってもんだぜ」

他の男たちも頷いて、手を伸ばしてきた。
ふたつしかない乳房を、
3人の男が寄ってたかって揉みしだく。
揉み上げ、押し潰し、乳首をつまんでは引っ張っては
笑い声をあげる。
夜一は快楽と恥辱に喘ぎ、苦悶した。
それさえも、男たちにとっては媚薬になった。

「へへへ。オッパイがでかいと、
乳首までででかくてしゃぶり甲斐があるぜ」
しゃぶるというよりは噛み付くほどの勢いで
乳首を咥えられる。
しかしそこに痛みはまったくなく、
甘い痺れだけが湧き上がってきた。
「あぁああ！　だ、駄目じゃ、
そんなにソコばかりを……あぁああっ！」
「おいおい、注文の多い女だな。ま○こも駄目、
乳首も駄目じゃ、俺たちはどこを
可愛がってやればいいんだ？」
どこにも触れるな。そう言うはずだった口からは、
ただ喘ぎだけでまともな言葉が出てこない。
喘ぎすぎて混濁し始めた意識が、
理性よりも本能を剥き出しにし始めていた。
（いかん……！アソコがうずく！
乳首への刺激が、全部子宮へと伝わっていくようじゃ！）
子宮は女性の性本能の塊だ。特に夜一は、
はっきりと子宮がうずく感覚を覚えていた。
男は夜一の言葉など気にとめる風でもなく、
乳首をしゃぶり続けていた。
時に甘く、時に激しくしゃぶり、
吸い付く口戯に、夜一は更に本能的欲求を高めていく。
「くくく。もう目元までトロトロじゃねぇか。
感じすぎて、もうなにも言えなくなってるんじゃないか？」
「それじゃあ、もっともっと感じさせてやるのが、
俺たちの努めってもんだろうよ」
「あぁ……よ、よせ……もう、これ以上……んぁあっ！」

「やめっ！　今ソコを触られては……
くぅあああああああああああああ！！」

男の指が、的確にクリトリスを捉えた。
まるで乳首をつまむかのように陰核をつまみ、こねくり回す。
そのあまりに激しい快感に、夜一はついに腰を跳ね上げた。

「おぉ、すげぇ。今、ちょっと潮噴いたぜ？」
「もうとろけまくってるじゃねえか。
俺、早くぶち込みてぇよ」
「焦るなよ。今に女の方から挿れてくださいって
おねだりしてくるからな」

ほんの少し前の夜一なら、即座に反論していただろう。
しかし今の夜一にはそれができなかった。
むしろ、早くそれを言ってしまいたいとさえ思っていた。

（もう駄目じゃ……このまま堕とされてしまう…
この儂が、犯されて気持ちよくなってしまって……）

朦朧としていた。
しかし、女陰や乳房から与えられる快感だけは、
やたらとはっきり分かってしまう。
膣内が熱くとろけ、
男根を要求しているのが分かってしまった。

どこか客観的に自分の状態を見てしまっている夜一。
もちろん男たちにはそんなことはどうでもいいこと。
ほとんど抵抗がなくなり、
むしろ自分から脚を開いて股間をさらけ出す女に、
征服欲を刺激されていた。

「よしよし。まずは指でイかせてやるからな！」

舌なめずりをしながら、指で膣を犯す。2本3本と同時に突き込み、熱くとろけきった膣の中を掻き回した。

グッチャグッチャという水音が響き渡り、それが淫らなBGMとなって男たちのみならず夜一までをも燃え上がらせる。

男の1人はすでに自分のイチモツを取り出して、自分で扱き始めていた。

「あぁ、だ、駄目……い、イくっ、イってしまうっ！」

「いいぜ、イけよ。ほら、ほらっ！」

「ふあ、あぁあ……っく！　ンッ、あぁああ——ッッ！！」

男の指が根本まで潜り込んだその瞬間、夜一は快感の爆発にその身をさらした。

「あぁあっ！　ンぁあああああああああああああ！！」

激しい絶頂感が夜一を支配した。なにも考えられず、なにも感じられず。ただ官能だけがそこにあった。

「くっ……放せ！　放さんか！」

誰一人として夜一の叫びに耳を貸さなかった。それどころか、
その声さえも楽しむかのように身体をまさぐり続けている。
すでに裸に剥かれ、腕を縛り上げられている夜一。
叫んで威嚇することしかできないのだが、
それがまったく効果がないと知っても、叫ばずにはいられなかった。

（くぅ……このようなヤツらにいいようにされるなど…！）

夜一が反抗できないのをいいことに、男たちは淫らな接触を繰り返す。
乳房を掴み、揉みしだき。乳首に吸い付き、時に噛み付き。
腰に回していた手はいつの間にか股間へと伸び、女性の弱点に触れていた。

「くくく、もう濡らしてるじゃないか。意外と感じやすいんだな」
「馬鹿を申せ。おぬしらのような稚拙な愛撫など、なにものでもないわ」
「へぇ、そうかい？　その強がりがどこまでもつか、見物だな」
「くっ！　たわけたコトを……あぁあっ！」

強めに乳首に噛み付かれ、思わず声をあげてしまう。
それに呼応して、男たちが下卑た笑いを湧き上がらせた。しかし愛撫の手はとめることなく、更に密度を増していく。
全身を這い回る指のこそばゆさ。そして、認めたくはないものの、
確実に迫り上がってくる官能の波。息も次第にあがり始め、吐息に艶っぽいものが混じっていく。

（いかん…このままでは、堕とされるのも時間の問題…！なんとかして逃げ出さなければ！）

しかし、すでに体力は限界を超え、縛られていなければ立っていることさえ辛い。
結界が張られているのか、鬼道も発現しなかった。

「さぁ、どこをどうして欲しい？　先代隠密機動総指令官様だ。ちょっとくらいのわがままなら、聞いてやってもいいんだぜ？」
「ならば、さっさとこの汚い手を放せ……と言っても、どうせ聞きはしないのであろう？」
「いいぜ？　その代わり、すぐにチ〇ポをブチ込んでやるだけさ」

つまり、どうやって犯されたいか聞きたいだけなのだ。夜一は苦虫を噛み潰したような顔をして、男たちを睨み付けた。
もちろんそんなことでたじろぐような男たちではない。
むしろマゾヒスティックな快感を覚えているのか、恍惚として微笑む者さえいた。

「ちょっと触られただけでま○こビショビショに濡らして……とんだ淫乱メス猫だな」

これまでになくいやらしい笑いを浮かべて、男たちが愛撫の手を強める。
すでに愛撫というよりは強姦といった手さばきで、夜一の秘部を揉みしだいた。

「くう！　や、やめろ……やめんか！」

背後から乳房を鷲掴みにされ、力尽くで揉み上げられた。
痛みを伴う愛撫は、夜一に強い屈辱を与える。しかし、それと同時に官能も与えていた。
乳房を揉み、同時に乳首をつねり上げられ、その刺激で身体を弾かせた。
甘い快感が身体中を駆けめぐり、つい喘ぎを漏らしてしまう。

「なんだ。乱暴にされるのが好みか？　それならそうと、早く言えばいいのに」

別の男が、膣に指を突っ込んできた。
少しの容赦もないその挿入に、夜一は高く喘いでしまう。そんな声を一声あげるたび、理性が削り取られていった。

「や、やめろ……そこは、あっ……くう！　指など、入れるな……ああっ！！」

やめろと言われ、男は更に力を込めた。中指と薬指、2本の指を夜一の柔肉へと突き入れる。
そして何度か出し入れをして、淫らな水音を響かせた。

ニヤニヤと笑いながら、膣内で指をくねらせる。膣道を広げるようにしたり、
中でバタ足するように指を暴れさせる。その都度、痛みと快感が交互に夜一の心を刺激し、激しい喘ぎを吐かせていた。
更に膣内で指を曲げ、膣の前壁あたりを使用に擦る。

「やっ、やめろ！　そこは……ああああああああ！！！」
「来た来た！　軍団長の快感ポイント発見っ！」
「あぁあああぁあああああああああああああ！！！」

目の奥で火花が散った。
同時に身体が爆発し、頭の中が真っ白になる。

「あぁ……そ、そんな……儂が、こんなヤツらにイかされるなど……」
「身体は正直だねぇ？　でも、まだ終わりじゃないぜ？」

指を抜かれた瞬間、別の男にペニスを挿入された。一気に子宮口まで押し込まれ、息苦しさに喘ぐ。
しかしそれと同時に、また絶頂感が来た。脳天を焼き尽くすかのような衝撃に、しばしの間呼吸が止まる。

(いかん……いかん！　来てしまった。もう、こやつらに逆らえん……！)

自分の中のオンナが、快感を求めてしまった。しかも、複数人から様々な攻めを加えられる、とびきりの快楽。
夜一は心のどこかでまだ男たちを拒否しつつも、肉体的には全面的に降伏してしまった。

「くぅ……いい締まりだぜ。これを知っちまったら、他の女はなかなか……」
「ふん……ほ、褒めているつもりか……嬉しくなどないわ」
「へぇ？　まだ強がれるんだ。もう完全に堕ちたと思ったけど！」
「あぐっ！　んんぅう！」

別の男が、乳首をつねり上げた。その刺激がまた電気となって体中を駆けめぐり、快楽中枢をスパークさせる。
抵抗すればするほど激しく攻め立ててくる男たちに、夜一は屈辱よりも快楽を覚えてしまう。
それは、心まで堕ちてしまう前兆だった。

「ほらほら。もっといい声で鳴いてくれよ？　そしたら、濃いザーメンをたっぷりとくれてやるぜ」
「馬鹿を申せ……この儂が、犯されている程度で……こ、声など……あぁあっ」

演技ではなく、喉の奥から喘ぎがにじみ出てきた。
その声に乗って、激しい痺れが込み上げてくる。

「あぁ、だ、駄目じゃ。またイく……イってしまううう！」
「ははは！　イけ！　イっちまえ！」
「んあぁあああああああああああああああああああ！！」

膣から、乳房から、全身に官能の電撃が走る。
恥も外聞もなく声をあげる夜一に、男たちは歓喜の声をあげていた。
そして夜一自身は、その声にさえ快感を生み出され、また喘いでしまっていた。

「ほら、しっかりとしゃぶってくれよ？」
「うぅ……んっ、うぅうう……」

男の足の間に入り、屹立したペニスを掴まされていた。
もちろんやることはひとつなのだが、唯々諾々と従えない気丈さが夜一にはあった。

「どうした？　ちゃんと俺を感じさせなきゃ、コレはお前を気持ちよくしてくれないぜ？」
「わ、分かっている……舐めればいいのだろう、舐めれば」
「そうだ。ネコがミルクを舐めるように、ちゃーんと舐めてくれよ？」

むしろ無理強いされた方が舐めやすかったかもしれない。
見知らぬ男のペニスを自ら舐めるような行為は、夜一の自尊心に消えないキズを付けていた。
それでも、すでに快楽の虜となっている身としては、いいなりになるしかないのも事実。
先ほどから子宮がジンジンとうずき、早くこの大きなペニスを膣で呑み込みたいと身体が叫んでいた。

「あむ……ん、ちゅっ。ちゅぷ、じゅっ……じゅるるっ」
「おぉ！　いい、いいぞ。もっと深くまで呑み込むんだ……おお！」

言われるがままにペニスを飲み込んでいく。一度口にしてしまえば、もうためらうこともない。
膣口もいいが、口腔もいいとばかりにペニスを頬張る。
ただ口に含むだけで男が満足するはずもない。
吸い込み、頬で幹を擦りつけたり、舌を動かして亀頭をねぶる。唾液を流し、すぼめた口を上下に動かせば、男からはケモノのような声があがる。

「おぉおおお！　いいぞ。さすがに手慣れた舌さばきだな！」

口の中で脈打つ肉棒をまんべんなく舐め、愛撫する。
亀頭のエラを舐め、尿道口をくすぐり、幹を吸い込む。
ジュルジュルという汚らしい水音も、自分が出しているのだと思えば官能的な音に聞こえた。

（コレが、欲しい……口なんかじゃ足りない…！
アソコの奥に無理矢理突っ込んで、グチャグチャに掻き回してもらいたい！）

フェラチオに夢中になっていた夜一の股間に、男の手が伸びた。
瞬間、驚いて口を離すが、男のにやけ顔に促されてすぐにフェラを再開する。
男の手が、ヴァギナを揉み込んだ。太い指が秘裂をまさぐり、敏感な突起を擦りつける。夜一は、ついその快感を味わってしまい、舌を動かすのを忘れた。
すると男は腰を突き上げ、ペニスを無理矢理喉にまで押し込む。

「んぶっ！？」
「おらおら！　ちゃんとと続けろって言ってるだろうが！」
「んう．　……んっ、じゅっ、ちゅぶ。じゅるっじゅるる、ちゅぶ、んう．　っ」

息苦しさに涙目になりながら、慌てて口をすぼめた。頭を上下させてペニスを口腔で扱き、舌を暴れさせて亀頭をしゃぶる。
満足げな吐息を出した男は、それでも手の動きをやめなかった。

(いかん。感じてしまうと、口が上手く動かせなくなる)

男の指が膣へと潜り込んだ。十分すぎるほどに潤っているクレヴァスは難なく男の指を潜り込ませ、裂け目の奥へと招き入れる。
そしてペニスでそうするように、指を激しく出し入れし始めた。

「んう．　う．　！　んっ、ちゅぶ。んう．　、じゅるる、ちゅぶっ！」
「やれやれ。ちょっと弄られただけで、フェラすら満足にできなくなるのか？　そんなことじゃ、いつまでたってもココには入れてやれねぇな？」

ここ、という言葉に指を反応させる。膣内の浅いところで暴れさせ、淫らな水音を響かせた。
まるで水遊びをしているかのような音は、大量に溢れ出している愛液のせい。
それが内ももを伝い流れていくこそばゆさもまた、夜一の官能を高めている。
官能が官能を呼び、更に激しい快感を熱望する。そのためには男を悦ばせなければならないのに、今ある快感に負けて口元がおろそかになってしまうのが辛かった。

(一度、射精させなければ駄目なのか？　フェラで出させなければ、膣には入れてもらえぬのか？)

あまりの切なさに男を見上げ、目線で懇願する。その表情が気に入ったのか、男はゴクリと息を呑んだ。

「くくく。そんなに物欲しそうな顔するなよ……こっちまでたまらなくなっちまうぜ」

夜一は亀頭だけを咥え、激しく舌を動かした。エラをしゃぶり、尿道口に突き入れ、全体を吸い込む。
そしてまた懇願するように目を向け、セックスをねだった。

「し、仕方ねぇな……じゃあ、気の済むまで犯してやるぜ」

四つんばいのまま、男にのしかかられた。
そしてとろけきったヴァギナに、荒々しく突き込まれる。

「あぁっ！　ンぁあああああああああああああああああ！！」

熱い肉棒が体内に入った瞬間、夜一は絶頂した。
真っ赤に焼けた火箸を腹に押し込まれたかのような衝撃的な官能。痛みではなく最大級の快楽が、夜一の心を焼け付かせた。

「おいおい。挿れただけでこの締まりかよ。どこまで淫乱なんだ！？」
「お、おぬしが焦らしすぎたせいであろうが……あぁ、も、もっと激しく……んん！」
「しょうがねぇ……ほら、くれてやるよ！」

バチンッと音をたて、殴打するような挿入が連続された。その度に体内の空気を絞り出されるかのように喘ぐ。
淫らなハーモニーが紡ぎ出され、しばらくリズミカルな音楽が流れた。

（あぁ、これだ。儂はこの快感を待っておったのだ！）

夜一はもはや犯されているという感覚さえなくし、体内を駆けめぐる男根に愛さえ感じ始めていた。
男の乱暴な抽送も、今の夜一にとっては愛の行為にさえ思われる。
完全に堕ちているのだ、そんな考えさえ浮かばず、ただひたすら快感を貪るオンナになっていた。

「はぁ、はぁ、いい……いいぞ。またイく。イきそうじゃ……あぁぁあ！」
「何度でもイきやがれ。お前の身体の、中も外も、全部ザーメンまみれにしてやるからよ！」
「中も……外も……あぁあ！」

想像しただけで軽い絶頂が来た。
それに連鎖して、次から次に絶頂の波が寄せ返す。

「んぁあああ！　イくっ、イってしまうっ、おかしくなるぅぅぅぅ！！」

身体中が快感の虜になっていた。
息をするだけでイきそうになり、触られるだけでイった。
夜一はもう、快感のことだけしか考えなくなっていた。

「んんっ、う　っ！　んうううっ！」
「くっくっく。なかなか色っぽい声で喘ぐじゃないか」

問答無用で突き込んだペニスを根本まで沈め、男はゆらゆらと身体を揺さぶった。
まるでスライムのようなゼリー状のベッドは、しっかりと立つには不便だが、女を抱くのにはちょうどいい。
しかもそれが強姦であれば、女は逃げようと踏ん張ることもできずにもがくだけ。しかもゼリーがぬめっているのだから尚更。

(力が入らない。男の手から、逃れられない……何故、このようなことに……！)

ネムほどの手練れであっても、食虫植物に捕まった虫同然。しかし捕食者は植物ではなく、ネムの身体を蹂躙して悦ぶ男であった。
身体の自由が利かないネムの腕を掴み、たぐり寄せるようにしてペニスを抽送する。
激しくはないが、男根の存在を強く感じさせるやり方に、ネムは目まいを起こしそうだった。
口に張られたテープでの息苦しさもあるかもしれない。

「これがウワサの12番隊が開発した肉人形か……さすがにいい出来だぜ」

普通の女にはしないだろう、というくらいに強く腕を引く。当然その分、ペニスが深くまで押し込められ、ネムはまた喘ぎで喉を鳴らした。

「ふうん、感度もいい。こりゃ、男を悦ばせるためだけに生まれてきたってのも、あながちウワサだけじゃないな」

男は更にペニスを無理矢理押し込み、股間を殴るかのようにぶつけ出す。バチンバチンと肉がぶつかる音に、淫らな水音が和音となってメロディを奏でた。
それはもちろん激しい官能を巻き起こし、男からはケダモノの鼻息を、ネムからは艶めかしい喘ぎを奏でさせ、更なる音楽を紡ぎ出す。

(いけない。声が出てしまう。感じてしまっている……こんなこと、いけないのに！)

男の荒々しい陵辱は、生みの親の行為によく似ていた。
父と呼ぶべき男からも、よく同じような無理を強いられる。しかしネムは、それに逆らったことはない。逆らうことなど、考えたこともなかった。

(でも、これは違う。この男はマユリ様ではない……私の身体を、もてあそんでいい男ではない)

不愉快だった。しかし、身体の自由は利かず、白打を組むこともできない。もちろん鬼道も封じられている。
だからといってこんな男に組み敷かれ、なすがままにされている自分が許せなかった。込み上げてくる快感に、徐々にあらがえなくなっている自分が不愉快だった。

「その綺麗な顔、もっともっと苦痛に歪ませてやるよ」
「んう．ぅうううう！！　んっ、んぅうううううう！！」

体勢を入れ替えたかと思うと、もう1人の男が背後からのしかかってきた。そして前戯もなにもなく、肛門へとペニスを突き立てて来る。

「くぅ！　せ、狭い！」
「おぉ。ハラん中で擦れてやがる……気持ち悪いな、ははは！」

先の男のペニスが膣道に埋まったままで、直腸にまでペニスを埋め込まれた。その圧迫感に、つい涙をこぼしてしまうネム。
男たちはそれを見て、悔しさや痛みの涙なのだと笑い出した。

しかし本当に悔しいのは、無理強いされているにもかかわらず感じてしまっていることだった。強い圧迫感のある2穴攻めも、普段からマユリの激しい体罰を受けている身としては驚くほどの脅威ではなかった。

「2本挿ししたら、更にいい具合になってきた。こりゃ、あんまりもたねぇぜ」
「ケツの穴もいい具合だぜ。こんな具合のいい肉人形なら、俺も1体欲しいな」

男たちは息を合わせてネムの体内をえぐりまくった。膣と直腸の奥まで同時に突き込んでみたり、代わる代わる出し入れしてみたり。
一突きごとに理性を奪われ、代わりに快楽を与えられる。常人よりも理性があるはずなのに、3分も保たずに絶頂感に見舞われた。

（あぁ、駄目。犯されているのに、イってしまうなんて……あぁあ！　マユリ様、申し訳ございま……）

心の中の詫びさえも、最後まで言うことができなかった。
膣を犯す男の方が腰を高く上げ、派手な射精を繰り出した。
膣内を満たしていく生暖かい粘液の感覚に、ネムも強い絶頂感を覚える。

「くぅうううう！　しっ、締まるっ！　俺もイくぞぉ！」

間髪入れず、尻を犯していた男が、その長いペニスを根本まで押し込んできた。直腸内に注がれる精液は、膣内のものよりも熱く、大量に感じられた。
体内の薄皮一枚挟んだ穴の中で、それぞれのペニスが爆発しきる。暴れ回り、体内を食い破ろうとする勢いの男根に、ネムは激しすぎる快楽を覚えた。

（すごい。熱い……こんなに気持ちいいこと、マユリ様からは……あぁ、駄目。そんなことを考えてしまったら、私、もう戻れなくなってしまう）

「それにしてもすげぇな。まだまだまったく萎えないぜ」
「あぁ、それじゃあ今度は、入れる穴変えてやらないか？」
「そうだな。でも、その前に犯される側の意見も聞いてみないといけないんじゃないか……なぁ？　お前も、まだまだ犯して欲しいよな？」

歪んだ笑いを浮かべる男たちに、ネムはほんの少しためらっただけで大きく頷いた。
なによりも、快感に逆らえなくなってしまったのだった。

Sexial　Battle　BLEACH編　フルカラー同人誌

●原画　クリムゾン

●発行　クリムゾン

●印刷　大陽出版株式会社

この本は同人ソフト「Sexial　Battle」で使われたCGを収録したものです。

2006年　10月　20日　初刷発行
http://www.alles.or.jp/~uir

我慢しなくても好きに喘いでくれていいんだぜ？
妻がそんなことを……んんっ！
く……喘いで……
はぁ！
あッ!!
あッ!!
知らず、あえぎ声が漏れていた。こそばゆさが乳房から全身に伝わる。
それでも我慢しなければと声を押し殺し、
男たちへの罵倒の言葉さえも呑み込んでしまう。
しかし乳首をぎゅっとつままれた瞬間、
我慢は限界へと達した。
狭い媚肉を掻き分ける快感は、なににも勝るものだった。
しかも突き入れる度にそして引き抜く度に揺れる乳房の美しさも。
その苦痛と快感の入り交じった悲鳴も極上。
ビクンビクンと震える身体に、
強姦しているのだという嗜虐心をくすぐられて、
男は何度も何度も腰を振る。愛液が絡む水音も、
股間がぶつかる打撃音も、
なにもかもが最高の官能だった。
指を抜かれた瞬間、別の男にペニスを挿入された。一気に子宮口まで押し込まれ、息苦しさに喘ぐ。
しかしそれと同時に、また絶頂感が来た。脳天を焼き尽くすかのような衝撃に、しばしの間呼吸が止まる。
自分の中のオンナが、快感を求めてしまった。しかも、複数人から様々な攻めを加えられる、とびきりの快楽
夜一は心のどこかでまだ男たちを拒否しつつも、肉体的には全面的に降伏してしまった。
クリムゾンフルカラー同人誌　第6弾
●18歳未満の方は購入できません